

日本から一番遠い  
南洋の委任統治領  
その死闘の跡をたどる

# マーシャル諸島

Marshall Islands

日本軍の防衛線の一角を占めたマーシャル諸島  
米軍は攻略する島を選別したために  
日本軍守備隊は玉砕と飢餓という  
二つの運命に分かれた

文・写真撮影 = 鈴木千春



昭和18年(1943)4月、クエゼリン神社に整列する、在りし日の海軍陸戦隊の勇姿。司令部のあるクエゼリン本島には約5200名の将兵が配備されていた。

ルオット島に残る第二十四航空戦隊司令部跡。爆撃の傷痕は生々しく、建物の中から将兵の慟哭が聞こえてくるようだった。島の形が変わるほどの砲弾を撃ち込まれ、人間が蒸発するほどだったという。



米軍が占領直後に撮影した第二十四航空戦隊司令部(右写真は現在)。手前には砲爆撃で破壊された日本軍機の残骸が散乱している。



## 委任統治領「南洋群島」

第一次大戦後、日本はドイツ領だった南洋群島を委任統治することとなった。南洋群島とは赤道以北のマリアナ(グアム島を除く)、カロリン諸島、マーシャル諸島を指す日本での呼称だった。大正十一年(一九二二)に南洋庁が発足し、島の保健・衛生、教育など島民の生活上を図り、産業を育成した。島には日本からの貿易商や移民が増え、漁業やコブラ産業などが盛んになった。一方で、委任統治領としての制約から軍事面は手付かずだった。

南洋群島の最東端にあるマーシャル諸島は二九の環礁と五つの島から成る。個々の島は地積が狭く、山も川もなく平坦で海抜は二〜三メートルしかない。地面を掘るとすぐに海水が出るため、防衛陣地の構築には不向きだった。

しかし、マーシャル諸島は連合国の偵察機が届かないハワイとオーストラリアの中間に位置するため、日本にとっては非常に重要だった。日米開戦後は日本本土からトラック島経由で補給をし、ウエーク島、ギルバート諸島方面の中継補給基地ともなった。また、クエゼリン環礁の礁湖は広大で水深もあり、艦艇の錨地や潜水艦基地として

最適だった(海の透明度が高く、海底まで丸見えという難点もあった)。

海軍はマーシャルの各島に飛行場を建設し、昭和十六年(一九四一)三月から第六根拠地隊が守備する前線基地となる。島民を避難させ、対米戦争に備えた。

開戦直後の昭和十六年十二月十日、日本の海軍陸戦隊は米豪間の連絡ルートを遮断すべく、マーシャル諸島の南にある英国の委任統治領ギルバート諸島を無血占領する。同月二十三日には海軍陸戦隊がウエーク島を、昭和十七年八月にはナウルを占領。第六根拠地隊の防備エリアは、北はウエーク島から南はナウルまで、とてつもなく広大になった。

## 米軍の中部太平洋作戦

昭和十七年になると米軍は次第に巻き返してくる。最初の反撃は同年二月一日、真珠湾で生き残った米空母によるマーシャル、ギルバート方面への奇襲だった。その後、ミッドウェイ海戦で日本海軍が主力空母四隻を失い、主戦場はソロモン諸島と東部ニューギニアに移り、中部太平洋への本格的な攻撃は行われなかった。

昭和十八年五月に米軍がアッツ島を

\*2=日本は昭和6年(1931)の国際連盟脱退に続き、昭和11年の第二次ロンドン軍縮会議からの脱退を契機に、南洋群島の武装化に着手した。マーシャル諸島は日本本土から遠いこともあり、軍事施設の建設は遅れた。

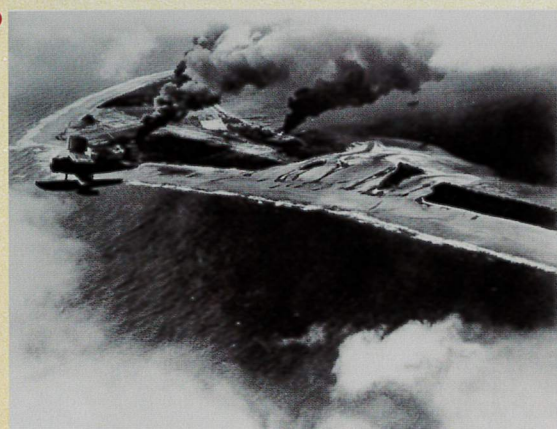
\*1=国際連盟の委任統治領では、軍事施設や軍隊の配備など武装化が禁止されていた。



写真で  
見る

## マーシャル諸島の戦い

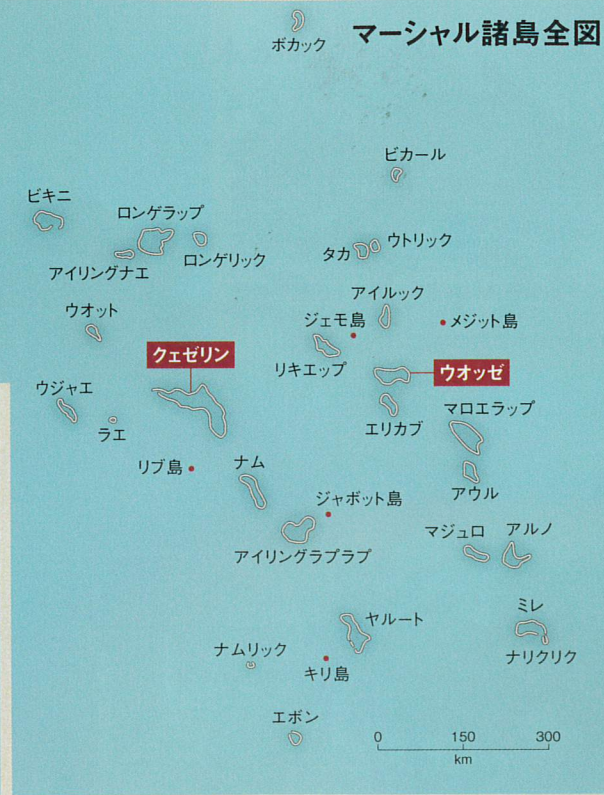
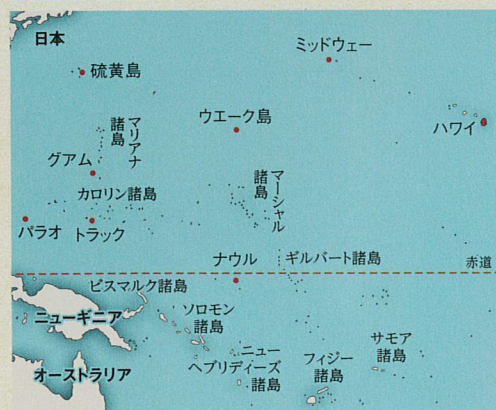
最東端の日本領で繰り広げられた激闘



①日本軍の弾薬庫に魚雷の弾頭があるのを知らずに、米兵が梱包爆薬を投げ込み大爆発した。第一陣でルオットに上陸した米兵の過半数が吹き飛んだ。②弾薬庫の前で投降する軍属。すぐ後ろの地面に白鉢巻きの日本兵が倒れている。③昭和17年2月1日、米重巡の艦砲射撃を受けるウオツゼ。上陸を免れた島にも連日、激しい爆撃が加えられた。④椰子林は爆撃でなぎ倒され、身を隠すものがなくなった。タコ壺で日本軍の狙撃兵を狙い撃つ海兵隊。⑤撃破された日本海軍の水陸両用戦車・特二式内火艇。クエゼリンが初の実戦となった。



終戦後のマーシャル諸島は米軍の支配下に置かれ、1947年からは国連の信託統治領として米政府が管理した。また1946年から58年までビキニとエニウエトクで核実験が行われた。1986年にマーシャル諸島共和国として独立している。



攻略した後、八月にカナダのケベックで米、英の首脳会談が行われ、ここで中部太平洋を含む今後の作戦が具体的になった。米軍はニューギニアと中部太平洋の二方面から西進して日本本土攻略のための前進基地を確保することとした。日本軍が守る拠点を選別して占領する「飛び石」作戦だった。中部太平洋で最初に予先が向けられたのはギルバート諸島だった。昭和十八年十一月二十一日、マキン、タラワに上陸を開始した米陸軍第27歩兵師団と米海兵第2師団が日本軍の第三特別根拠地隊と激闘の末に両島を占領した。そして次の攻撃目標を目の前に広がるマーシャル諸島と定めた。

当初クエゼリン、ウオツゼ、マロエラップの三島へ同時に上陸する予定だったが、航空偵察の結果、上陸は防御が一番手薄なクエゼリンに絞られた。防御が堅いウオツゼ、マロエラップなどは、放置することで自軍戦力の消耗を避け、占領後にクエゼリン飛行場から大型爆撃機で空襲すれば、これらの島々を制圧できる。この作戦により、マーシャル諸島の日本軍守備隊の運命は二つに分かれることになった。

上陸された「玉砕の島」と、素通りされた「飢餓の島」とである。

### 上陸された「玉砕の島」

第六根拠地隊司令部が置かれていたクエゼリンでは、前述の奇襲で、司令官の八代祐吉少将と首席参謀の法元廉中佐が同時に戦死した。司令部は防御法を検討するも補給はなく、トーチカ等の防御設備は偽装されなまま地上に露出し、身を隠す地下陣地もなかった。補給が途絶えた理由は、ミッドウエー海戦での敗北により、米潜水艦の活動が活発化し、次々と輸送船が沈められたことにある。

ミッドウエー海戦時、クエゼリン環礁内に待機していた多数の潜水艦や特務艦艇は、勇躍して無線通信で戦況を傍受していたが、刻々と入る悲報に落胆したという。日本から一番遠い島は、補給路が生命線。深刻な状況になることを誰もが予想した。

防備強化のため、昭和十九年一月初頭に上陸戦の専門部隊、陸軍の海上機動第一旅団第二大隊が派遣され、海軍の指揮下に入った。続々と陸軍部隊が到着し、各島へ展開するため島は混乱していた。そのさなかの一月三十日、米第五艦隊の空母艦載機による空襲が始まる。満洲から着いたばかりの部隊は、ウオツゼへ派遣予定だったが待機



P5写真②と同じ弾薬庫。頑丈な鉄筋コンクリートは50cmほどの厚みがあり、猛爆撃に耐えた。ルオットはクエゼリン本島よりも遺構が多く残っている。



ルオットには日本軍が築いた貯水槽が残っている。プールのような大きさで今も雨水をたたえている。



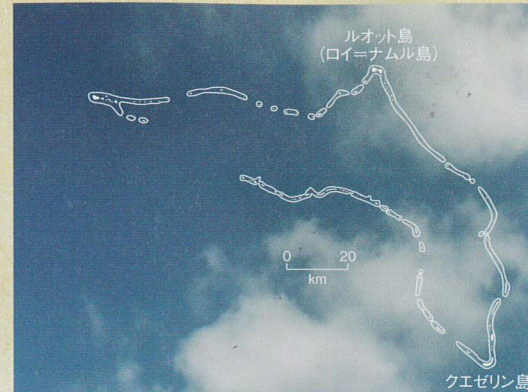
マーシャル方面遺族会の慰霊碑の裏面。昭和50年、現地慰霊に来た遺族は碑にすぎり、肉親の名を呼び嗚咽した。(P9コラム参照)



(上、下)クエゼリン島内の米軍のラボには、カルピスのビン、水筒、食器など、数多くの日本兵の遺留品が保管されている。



(上) 爆撃で破壊されたクエゼリンのトーチカ。(中) ルオット占領後に撮影された日本軍の四十口径八九式12.7cm高角砲。(下) 現在もルオットの砲座跡に残る12.7cm高角砲の残骸。



# 「激戦」そして「玉砕」の島 クエゼリン環礁



(上) ルオットに残る日本軍のトーチカ。珊瑚礁の島は地下を掘れないため、構築物は地上に露出し空襲の目標にされた。補給が途絶え、セメントも資材も不足した。(右) クエゼリン本島の日本軍トーチカ跡。島内は全域がゴルフ場のように芝生に覆われている。米軍は日本軍の一部の遺構を白い柵で囲み、戦闘場面の写真や解説プレートをつけて維持管理している。



中に空襲が始まった。艦砲射撃も加わり、航空機のほとんどが破壊された。二月二日、総指揮官レイモンド・スプルーアンス中将麾下の水陸両用部隊のうち第四海兵師団が、クエゼリン本島の西海岸から戦車を先頭に上陸を開始。日本軍は島の防備エリアを南北に分け、南を陸軍、北を海軍とした。第六根拠地隊司令官の秋山門造少将は「各隊一兵トナルマデ陣地ヲ固守シ、増援部隊ノ来着マデ、本島ヲ死守スベシ」と全軍に命令。しかし同日午後、秋山少将は前線視察のため壕から出た瞬間、砲弾を受け戦死した。南の陸軍では阿蘇太郎吉大佐が指揮を執り、夜襲を決行、死力を尽くして米軍を水際まで押し戻したが、黎明、集中砲火を受け後退。二月三日、四日と激闘は続き、日本軍は対戦車爆薬を抱え戦車に体当たりして抵抗したが制圧され、首脳部も四日に全員が自決した。阿蘇大佐は残る兵を率いて五日に突撃し、クエゼリン本島の日本軍は玉砕した。クエゼリンは初めて米軍に占領された日本領土(委任統治領)となった。

クエゼリン環礁の北側、双子島のルオット島(現在の呼称はロイナムル)には第二十四航空戦隊司令部が置かれ、

人工堤防でつながった両島には飛行場や兵舎、海軍施設があった。クエゼリンと同じ一月三十日、激しい空襲と艦砲射撃を受ける。航空機は被弾炎上、貯蔵していた魚雷、爆弾、燃料が焼失し、通信も途絶えた。米軍は二月二日、両島を占領。守備隊は壕や滑走路の排水溝から射撃し、果敢に抵抗したが、翌三日、数回にわたり夜襲をかけ、最後の突撃で玉砕した。

マーシャル諸島の北西端、エニウェトク環礁の守備隊は陸軍が主力だったクエゼリン、ルオット占領後、米軍はエニウェトク環礁にも空襲と艦砲射撃を繰り返した。守備隊は迫撃砲や小火器で果敢に抵抗し、最後にパンザイ突撃を敢行。二月二十二日、島は占領された。大本営はクエゼリン、ルオットの玉砕をラジオで発表した。なぜかエニウェトクの玉砕を伝えていない。

## 素通りされた「飢餓の島」

一方、ウオツェの守備隊は「必ず上陸部隊が来る」と信じて、士気が高かった。砲台には日露戦争時の戦艦「三笠」「春日」の副砲が配備されており、接近した駆逐艦「アンダーソン」に砲弾を命中させ、損害を与えていた。しかし米軍はマロエラップ、ウオツ

Column



島の西端の激戦地には玉砕した多くの将兵の遺骨の上に慰霊碑が建っている。

日系人とマーシャル人が建てた  
クエゼリン日本軍戦没者慰霊碑

戦後、日本軍の遺族会は、続々と肉親が戦没した地に慰霊碑を建て始めた。マーシャル方面遺族会(以下マ会)では、クエゼリン本島が米軍基地のため、部外者の立ち入りが(現在も)制限されており、苦難の道をたどった。

昭和38年(1963)のマ会の発足時より、慰霊碑の現地建立を国に請願したが進展がなく、英語が堪能なマ会の元海軍大佐が直接、現地の米軍司令部に手紙で交渉し、昭和42年に慰霊碑建立の許可が出た。同時期にマ会は、マーシャル諸島のマジュロで働いていた徳原徳子さんの存在を知り、現地情報収集のため文通を始めていた。

昭和43年、マ会は完成した慰霊碑を船便で送った。クエゼリン勤務で米軍司令官とも懇意だった徳子さんの夫、徳原勇氏(ハワイ生まれの日系人)が、責任者になり友人数名と1か月かけて碑を建立し、遺族の悲願が叶った。戦歿者とは直接関係のない日系人、マーシャル人の無償の奉仕により実現したのである。

昭和50年(1975)からはマ会の現地慰霊参拝も許された。すべては、亡き徳原夫妻のご尽力のお陰である。(文/鈴木千春)



(上) 昭和20年9月6日ウオッセ降伏式。米軍約80名、日本軍約100名が参列し、ラップとともに星条旗が掲揚された。日本軍の体面を汚さぬよう前日に予行練習を行ったという。掲揚ポールが島に残っている。  
(左) ウオッセの南端に建つ特設砲艦「豊津丸」の慰霊碑。昭和17年2月1日の揚陸作業中、米重巡「ノーザンプトン」等からなる米艦隊の砲撃を受け長時間交戦奮闘し大破、32名が戦死。砲艦長の太田増右衛門海軍大佐が慰霊碑を建てた。  
(下) 環礁内(キメジョー島沖)に擱座した「豊津丸」の残骸。



ウオッセ  
飢餓の地獄となった島



米軍の上陸に備えて築かれたウオッセの海岸トーチカ。中は4区画に分かれ、銃眼から見えるのは美しい海。激しい空爆の轟音や震動を想像してみたが難しかった。



(上) 艦載砲を沿岸防備に転用した15cm砲の砲身と二式大艇のエンジン。飛行艇棧橋付近に無造作に置かれている。(左) 空襲で崩れた発電所の内部。発電機が残っている。島内には発電所が3か所あり、ここが一番大きい。

現在のマーシャル諸島

大叔父がウオッセで戦没した筆者は、マーシャル方面遺族会として二〇一二年にクエゼリンを訪れた。慰霊祭には米軍関係者も参列した。日本兵約八〇〇〇名が眠る島は現在、米国防総省の弾道ミサイル防衛試験場になっている。今年二〇一九年二月、ウオッセに遺骨収容に行った。大叔父のいた第六十四警備隊本部付近を探索したが、手がかりはなかった。別のエリアで発見したご遺骨四八柱とともに日本に帰国した。島にはまだ約二七〇〇名が眠る。

筆者は現地の環境を体感し、当時の将兵の苦勞、苦難を察した。電気がない、水がない、野菜も果実も実らない。高温多湿で食糧はすぐ腐る。頼みの網は缶詰類だけ。常に灼熱炎天、紫外線は日本の一三倍の強さで、突然スコールが襲う。慣れない環境での戦い。

戦史では、触れられることの少ないマーシャル諸島の戦いだが、将兵は最悪の戦場で、最善を尽くした。最後の一兵になるまで戦った玉砕の島。補給を絶たれ、長い長い苦しみの中、餓死していった島。遠い南の島には、日本軍将兵の血肉と無念が、深くしみ込んでいる。

ゼ、ミレ、ヤルトには上陸せず、終戦まで空襲だけが続けた。昭和十九年一月三十日の空襲は「クエゼリン玉砕の報を知るまでは、ウオッセだけが集中攻撃を受けていると思った」という生存者の証言がある。米軍はそれほど大量の爆弾をマーシャル全域に降らせたのだ。

航空機を失い、レーダーが破壊され空襲警報も出せない。艦砲射撃で砲台、発電所、電信所も機能を失い、食糧庫に直撃弾を受け、ウオッセでは同年五月から餓死者が出始めた。戦闘よりも恐ろしい飢餓地獄が始まる。敵中に孤立した各島は、連日の砲撃になすすべもなく、病と飢餓に苦しむことになった。雑草、毒魚、ネズミを食べ、栄養失調の体をデング熱、アメーバ赤痢が襲う。屈強だった兵士は骨と皮になり、各島がサバイバル状態、終わりのない飢餓地獄に将兵の心も荒んでいった。

米軍の降伏勧告ビラを見て、兵の中には投降を企てて射殺されたり、食料窃盗の罪で処刑される者も出た。潜水艦での補給作戦も失敗し、絶対国防圏外になったマーシャル諸島には一度も援軍はなく、終戦まで敵機の猛空爆にさらされ続けた。飢餓は極限に達し兵は次々と餓死していった。

ランチェスタ・モデル

戦争科学の先駆者たち

特集

アメリカ海兵隊戦車隊/新解釈・桶狭間の戦い ほか

ミリタリー・戦史Magazine

Rekishi Gunzou

# 歴史群像



新解釈

## 桶狭間の戦い

信長は本当に「正面攻撃」で勝利したのか



# アメリカ海兵隊戦車隊

島嶼戦で培った強靱な突破戦術

日本海軍

## 小型潜水艇全史

“決死兵器”から“必死兵器”への変貌

戦跡レポート

### マーシャル諸島

日本から一番遠い南洋委任統治領  
その死闘の跡をたどる

“肥前の熊”

### 龍造寺隆信

【前編】国衆から肥前の覇者へ

獅子奮迅!

WWI ドイツ東洋艦隊



10

OCT. 2019  
No. 157

本誌価格  
¥935 (税別)

カラー着色写真で甦る

## 多砲塔戦車の時代